

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03206

研究課題名（和文）植民地朝鮮における考古学的調査研究資料を公開・共有・活用するための基礎研究

研究課題名（英文）Basic study for revealing, sharing, and utilizing academic data related with the investigation of archaeological remains in Colonial Korea

研究代表者

吉井 秀夫（YOSHII, HIDEO）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90252410

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本各地で残されている朝鮮古蹟調査事業に関わる研究資料（遺物・実測図・写真・地図）の分析を通して、朝鮮古蹟調査事業がどのように進められ、研究資料が日本と大韓民国にどのように所蔵されることになったのかを明らかにした。そして、さまざまな資料の整理作業を通して、朝鮮古蹟調査事業の実態を明らかにするためには、日本に残っている関連資料を公開し、韓国側に所蔵されている資料と共有・活用していく必要があることを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、今西龍が収集したコレクションの学史的意義の一端を明らかにすることができた。また、これまで未公開である、あるいはその存在が注目されてこなかった写真や地図を集成・検討して、その学術的意義を明らかにすることができた。そして今回の研究成果を、日本と大韓民国で開催された学術会議や市民講座で報告するだけでなく、オンラインシンポジウムを開催することで、さまざまな国籍・立場の人々と意見交換し情報共有することができた。

研究成果の概要（英文）： In this study, I analyzed academic data related with the investigation of archaeological remains in Colonial Korea (especially excavated artifacts, drawings, photograph, maps and so on). And I revealed that these data were separately housed at various institutions in Korea and Japan, acting as great obstacle to researching the results of the investigations in Colonial Korea. To shed light on the reality of the investigation of historic remains in Colonial Korea, it will be necessary to continue introducing related material remaining in Japan and compile them with the data remaining in Korea.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 アジア考古学 朝鮮考古学 植民地 考古学史 朝鮮

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

1900年に東京帝国大学から派遣された八木英三郎による調査以来、1945年に敗戦を迎えるまで、朝鮮総督府による植民地支配の下、日本人研究者は朝鮮半島における考古学的調査・研究を独占した。しかしその研究の実態については、不明な部分が意外に多い。1990年代頃から、ようやく日本や大韓民国(以下、「韓国」と記す)において、発掘調査報告書や論文類だけでなく、当時の関係者に対するインタビュー、新聞記事、現場の状況を記録したフィールドノート、ガラス乾板などを用いた研究が、本格的にはじまった。とはいえ、これらの資料を日本と韓国の間でどのように公開・共有していくのかについては、十分な議論・検討がなされていないのが実情であった。

中でも韓国において、朝鮮古蹟調査事業の研究成果の再検討が進む中で、日本に残された関連資料を掘り起こし、それらを整理・検討・公開していくことが、韓国側から強く望まれるようになった。具体的に申請者には、韓国の文化財庁・国立中央博物館・国外所在文化財財団などから、資料の調査について、さまざまな問い合わせや協力要請が寄せられてきていた。

### 2. 研究の目的

上記のような、朝鮮古蹟調査事業関係資料をめぐる研究状況や、関係資料の公開・共有に対する韓国側の要望に応えるために、日本側でどのような調査・研究が必要であり、またその成果を公開した上で、どのように日韓両国の間で共有・活用していくのかについて、基礎的な検討と実践を進めることを本研究の目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究を進めるために、(1)京都大学で所蔵・保管する朝鮮古蹟事業関係考古資料の整理・検討、(2)京都大学で所蔵・保管する朝鮮古蹟調査事業に関係する非文字資料(特に写真・地図)の整理・検討、(3)韓国側関係機関・研究者との対話および研究成果の発信、という3つの課題を設定し、以下のような方法で研究を進めることにした。

#### (1) 京都大学で所蔵・保管する朝鮮古蹟事業関係考古資料の整理・検討

本研究では、京都大学考古学研究室で保管している、今西龍旧蔵コレクションの整理を進める。中でも瓦類を主たる検討対象とし、実測・拓本および写真撮影を進めると共に、各資料の収集経緯および学術的意義を検討する。

#### (2) 京都大学で所蔵・保管する朝鮮古蹟調査事業に関係する非文字資料(特に写真・地図)の整理・検討

京都大学考古学研究室が所蔵する写真類のうち、大正二年度古蹟調査に関係する写真のデジタル化と、それらのメタデータの作成を進める。地図については、慶州関係地図の集成・検討作業をおこなう。さらに、濱田耕作・梅原末治が1918年におこなった朝鮮古蹟調査に関わる地図の検討を進める。

#### (3) 韓国側関係機関・研究者との対話および研究成果の発信

京都大学考古学研究室をはじめとする日本の関係機関で所蔵されている資料を、韓国側の資料と共有・公開・活用するための議論を、学術会議などの機会を通して、韓国側の研究者と進める。また、オンラインシンポジウムなどの方法で、さまざまな立場の人々に研究成果の発信をおこなう。

### 4. 研究成果

#### (1) 京都大学で所蔵・保管する朝鮮古蹟事業関係考古資料の整理・検討

今西龍が収集した瓦類のうち、京畿道広州・船里で出土した文字瓦の学術的意味を明らかにするために、国立中央博物館およびソウル大学校博物館所蔵品との比較検討をおこなった。その結果、文字の押捺方法には、タタキを用いて成形された粘土円筒に、印章を用いて文字を押捺する方法と、タタキ板に文字を刻んで、タタキによる成形と同時に文字を押捺する方法が存在することを明らかにした。そして、押捺方法の違いに関わらず、その文字内容は、「地名+受国蟹口船家草」を基本とし、その一部が省略されたものもあることを示した。さらに、地名と文字押捺方法との対応関係(図1)をもとに、これらの文字瓦が、新羅末・高麗初に、船里付近に築造された瓦葺建物に用いるために、京畿道各地で生産されたことを推定することができた。

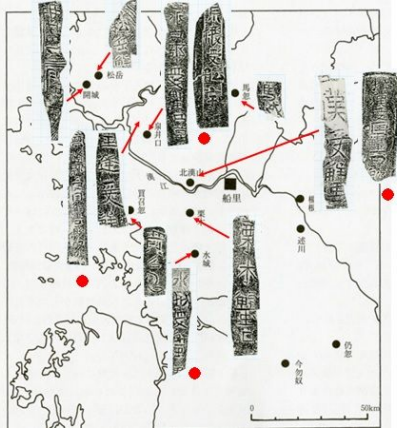


図1 船里出土文字瓦の地名比定地と文字押捺方法  
(赤丸は印章を用いた文字押捺方法によるもの)

また、平壤周辺および黄海道各地の墳墓から採集された楽浪センのうち、紀年が刻まれた資料を集成し、その製作技術と学史的意味を検討した。まず、同じ紀年銘をもつセンの比較検討から、文様が刻まれた複数の板を組み合わせることで作られた箱に粘土を詰めて、それを叩き締めることでセンが製作されたことを明らかにした。また、1930年代の紀年銘センの集成・研究において、本コレクションが複数の研究者によって参照・利用された可能性が高いことを指摘することができた。

(2) 京都大学で所蔵・保管する朝鮮古蹟調査事業に関する非文字資料(特に写真・地図)の整理・検討

京都大学考古学研究室が所蔵する大正二年度古蹟調査に関する写真を整理し、国立中央博物館所蔵写真・東京大学所蔵写真撮影目録・『朝鮮古蹟図譜』掲載写真との比較検討をおこなった。その結果、調査時に撮影した写真のガラス乾板を朝鮮総督府博物館に、焼付写真は東京帝国大学・京都帝国大学などにもたらされた後、『朝鮮古蹟図譜』の製作のために、ガラス乾板の一部が日本内地に持ち出された可能性が高いことを明らかにした(図2)。この検討を通して、日本の諸機関で所蔵されている紙焼写真が、朝鮮古蹟調査事業の実態を明らかにするために、活用できることを示すことができた。

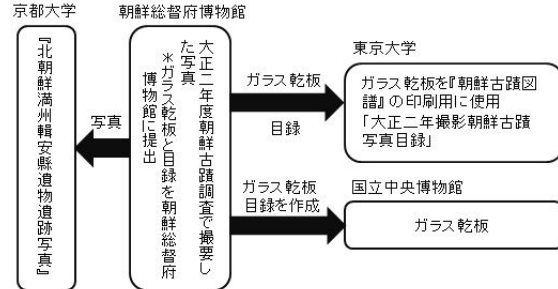


図2 大正二年度朝鮮古蹟調査写真の行方

地図については、慶州関係地図の集成・検討作業と。濱田耕作・梅原末治が1918年に調査した地図の検討をおこなった。その結果、1910年代の朝鮮古蹟調査において、さまざまな縮尺の地図が記録に用いられ、その成果が、同時代の地形図に詳細に反映されていったことを明らかにすることができた。さらに慶州においては、地形図をもとにして、さまざまな観光用地図が作製されたことを確認した。

(3) 韓国側関係機関・研究者との対話および研究成果の発信

2018年6月、国立中央博物館の招聘を受け、国立中央博物館・国立羅州博物館で市民向けの講演をおこなう機会を得ると共に、朝鮮古蹟調査事業関連資料の公開・共有・活用するための今後の方向性について、意見交換をおこなった。また、これまでの研究についてインタビューを受けた。

2022年9月には、国立中央博物館が所蔵する朝鮮古蹟調査事業関係遺物・資料の整理を総合的に進める「日帝強占期資料調査」10周年記念シンポジウムに招聘を受け、報告をおこなうと共に、韓国側の報告者と討論をおこなった。

本報告においては、朝鮮総督府による植民地支配下において、日本人が調査研究を独占した結果、遺物・ガラス乾板・復命書などが朝鮮総督府博物館に、焼付写真や図面・日誌・報告書関係の原稿などは日本内地の諸機関に分かれて所蔵されることになったことを示した(図3)。

そして、国立中央博物館が推進した日帝強占期資料調査は、分散した資料を統合し、現在の研究水準で再検討するために大きな役割を果たしたと評価した。また、分散した資料の統合・活用のために、オンライン上での関連資料の公開・共有事業を推進することを提唱した。

さらに、本研究に関わる研究成果を、学会で発表するだけでなく、市民講座などの機会をえ

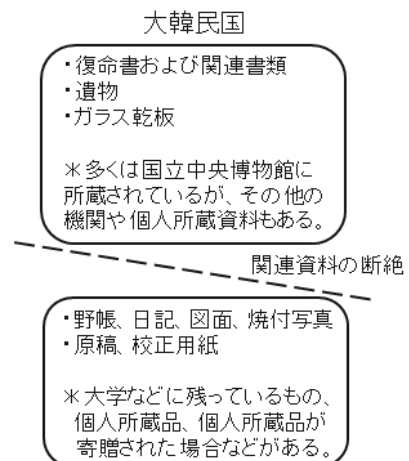


図3 朝鮮古蹟調査事業関連資料の所蔵状況(現在)

て発信を進めた。特にコロナ禍の中において、オンライン方式での発信を進めることができたのも、大きな成果であった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉井秀夫編	4. 巻 第142輯
2. 論文標題 「先学を語る - 有光教一先生 - 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『東方学』	6. 最初と最後の頁 77-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉井秀夫	4. 巻 -
2. 論文標題 地図を通してみた1918年濱田耕作と梅原末治の韓半島調査（韓国語）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユーラシアの考古と文化（慶北大学校考古人類学科40周年記念論叢）	6. 最初と最後の頁 1059-1075
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉井秀夫	4. 巻 -
2. 論文標題 朝鮮半島調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『鳥居龍蔵の学問と世界』	6. 最初と最後の頁 87-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉井秀夫・権五栄	4. 巻 1
2. 論文標題 対外交渉の性格（韓国語）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『馬韓考古学概論』	6. 最初と最後の頁 343-380
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 吉井秀夫	4. 巻 1
2. 論文標題 構築過程からみた三国時代墳墓の墳丘について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『構築と交流の文化史 - 工楽善通先生傘寿記念論集 - 』	6. 最初と最後の頁 125-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉井秀夫	4. 巻 -
2. 論文標題 「広州船里銘文瓦の考古学的再検討 - 今西龍収集資料の検討を中心に - 」(韓国語)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『佛智光照』	6. 最初と最後の頁 1118-1143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉井秀夫	4. 巻 -
2. 論文標題 「今西龍が収集した楽浪センとその歴史的意義」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『東アジア古代都市のネットワークを探る 日・越・中の考古学最前線』	6. 最初と最後の頁 189 - 196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉井秀夫	4. 巻 1
2. 論文標題 帝国主義時代慶州盆地新羅古墳関連地図の製作と活用 (韓国語・日本語)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『慶州大陵園一円古墳資料集成および分布調査総合報告書』	6. 最初と最後の頁 110-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉井秀夫	4. 巻 28
2. 論文標題 日本人研究者からみた日帝強占期資料の公開作業	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『考古学誌』	6. 最初と最後の頁 29-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 5件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 日本人研究者がみた日帝強占期資料公開事業
3. 学会等名 国立中央博物館所蔵日帝強占期資料の公開と活用 - 発掘資料を中心に(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 写真からみた大正二年度朝鮮古蹟調査
3. 学会等名 シンポジウム「大正二年度朝鮮古蹟調査を探る」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 植民地時代の地図を通してみた慶州古蹟の調査とその活用
3. 学会等名 京都コリア学コンソーシアム第62回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 地図からみた1918年濱田耕作・梅原末治による朝鮮半島調査
3. 学会等名 朝鮮古代研究会9月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 京都大学所蔵金冠塚関連資料について
3. 学会等名 シンポジウム「慶州・金冠塚が語りかけるもの」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 文化遺産学の新たな展開
3. 学会等名 文化遺産でつなぐ人文知 - 京都からユーラシア世界へ、原始から未来へ -
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 「石」からみた朝鮮半島の原始・古代
3. 学会等名 高麗美術館 第140回研究講座
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 日本からみた三国時代の栄山江流域（韓国語）
3. 学会等名 国立羅州博物館国外専門家招請特別講演（2018年6月26日）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 京都大学からみた朝鮮古蹟調査事業（韓国語）
3. 学会等名 国立中央博物館国外専門家招請特別講演（2018年6月29日）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 京都大学からみた朝鮮古蹟調査事業（日本語・韓国語）
3. 学会等名 第1回日韓文化財研究フォーラム（2018年7月15日）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 植民地時代の地図を通してみた慶州古蹟の調査とその活用
3. 学会等名 朝鮮古代研究会7月例会（2018年7月29日）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 「広州船里出土文字瓦の考古学的再検討」
3. 学会等名 朝鮮史研究会関西例会（2017年7月）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 「銘文瓦を通してみた9～10世紀韓・日平瓦の生産・供給体制」（韓国語）
3. 学会等名 『高麗太祖真殿寺院奉業寺の歴史的価値と保存方案』（2017安城奉業寺跡発掘20周年国際学術大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉井秀夫
2. 発表標題 「押捺方法からみた文字瓦の変遷とその歴史的意義」
3. 学会等名 朝鮮史研究会第54回大会パネル
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉井秀夫編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター	5. 総ページ数 120
3. 書名 京都大学考古学研究室所蔵 北朝鮮満州輯安縣遺物遺跡写真	

〔産業財産権〕

〔その他〕

吉井秀夫のホームページ  
<https://hb3.seikyuu.ne.jp/home/Hideo.Yoshii/>  
京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター比較文化遺産学創成部門  
<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/cschi-top/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------